

川柳句集

椿守

八木 千代

Chiyo Yagi

川柳句集

椿守

八木 千代
Chiyo Yagi

葉文館出版

序



私の子供の頃、福知山線の汽車は冬になると客車の屋根に雪を載せて大阪へと走っていた。米子機関区に属する記号の米の字が、黒い機関車の腹に浮き、白い雪と三等車の赤い横線が目の前を流れた。私の米子への最初の印象はこのようであつたが、それは雪だからといって冷え冷えとした感じのものでなく、民話の中の一齣の景色のように温かくなつかしい思いをさせた。

八木千代さんが川柳塔の仲間に加わり、便りをやりとりするようになって、米子市花園町と書き馴れてくると、なつかしい汽車の屋根の民話に花園が出現する。

やがてそこに四季の花が咲き、殊に沢山の花をつけた椿の木が見え隠れするようになる。

そして今、句集のタイトルが「椿守」というのを知り、千代さん自身が花園の精であつたのだと気付く。

花の中で椿が好き、椿の中でも蕨椿が一番ということと千代さんのお人柄が

分かる。

またひとつ鉦へ落ちけり藪椿

言水

藪椿は椿の原点、山寺などがふさわしいしずかなたたずまいの花だ。

千代さんは大正十三年一月二十九日のお生まれで、これは麻生路郎先生の『川柳雑誌』創刊と時を同じくする。一月十五日に創立句会を開催し、翌二月十五日に創刊号を発行されている。

千代さんが川柳塔の仲間として近作柳樽欄に登場したのは、昭和四十一年四月号からで、当時は、

病み姿見て欲しくない人待つ

ともかくも子は大学にたどりつき

というふうな句柄であった。

昭和四十年頃に今の川柳塔きやらばくの前身のグループを結成、常に川柳塔

の大きな、斬新な推進力になって下さっている。

木の机　鳥の匂いがしてならぬ

この世の因果はすべてこのようである。鳥に宿を貸した木には何となく鳥の匂いが残る。

机になっても残る。その分かる人は詩人だ。路郎先生の

鯛焼けば鯛の臭ひが残る也

も匂いの匂で、双方生活の中からの取材でありながら、先生の生活の臭いと比べれば個性が判然とする。千代さんや私の匂の先生に及ばないところは、この生活臭である。

二月十四日　椿に鳥が来ますよう

二月十四日はバレンタインデー。愛の日の偶感と評してよいであろうか。千代

さんには、右の手には取材発想と推敲のペン、左手は祈りの形という句が多い。
椿は八千とせの春秋、二月の花と言われる。

水鶏院釈真諦と日に三度

切り取った絵に宇治寺の鐘の音

昭和五十八年一月十四日、これは故西尾葉先生主幹就任披露の会の前日であつたが、西尾葉、東野大八、八木千代の三人と私とで宇治に遊んだ日である。黄檗宗万福寺門前の白雲庵で普茶料理を頂いた。葉先生のおごりだった。白雲庵の庭にポツンポツンと紅い椿の咲いていたのを覚えている。

直原玉青画伯に紹介して頂いて拝見した宝蔵院の一切經の桜の木の版木と、それを五十年間も刷り続ける摺師の姿に四人は圧倒された。次はその日の句である。

普茶料理大言壮語出来かねる

薫風

有縁の真ん中に椿が咲いてくれる

千代

のしかかる黒に版木の底の虫

大八

紅一点千代という名のめでたけれ

栞

後、平等院へ回り四人はそれぞれ鐘を撞いた。

鐘鳴らすいつも一つの願いごと

栞先生は平成八年この世を去られた。

桃の木に向うのひと世ふた世かな

私は自分の勝手な思いを並べて序文の紙数を費やしてしまったが、この世は夢まぼろしの世界だ。

桃の花と可憐な蕾の平和な桃源郷は、現世の苦を濾過したひと世ふた世であろう。

桃の字が思い出せずにおかしけれ

須崎豆秋

豆秋さんと千代さん、傾向は異なるがいずれも深い句境にある。

以下、千代作品十句

椿くわえて春を銜えて歩きたし

書きすぎぬように大事なひとに書く

夜明けまで山の向こうに行つてくる

若かりし日の母の手の匂いかな

笹に吊すあさきゆめみしゑひもすと

われは雁 月の真上を渡るなり

自らを傷つけて鳴る楽器たち

いざとなればうしろの藁に火をつける

枯野にも小さな弓は負うてゆく

椿もし振り袖着れば雪の紋

千代という俳句の加賀千代が先ずわれわれの意識を過る。夫の死後、妙好

人としての日に明け暮れながら一流の俳人としての名を成した。千代さんは千代女に似ている。

千代さん、これからもきやらぼくのお仲間と足並みを揃え、川柳塔へご尽力を頂きたい。私の片腕としてご支援を心からお願ひする。

愛もまた紅白のあり椿守

薫風

平成十一年二月椿の日

川柳塔社主幹
橘 高 薫 風

川柳句集
椿 守 目 次

序——橘高薫風	3
I	17
II	43
III	85
IV	121
跋——金築雨学	149
あとがき	155

川柳句集

椿

守

I

木の
机

鳥の
匂い
がし
てな
らぬ

二月十四日　　椿に鳥が来ますよう

鳥籠の水は毎日替えている

翼切られても鳥の瞳は空を見る

わたくしの中を通って咲く椿

思い切って咲いて椿は裁かれる

花時計の根が水切れをしているよ

春光のガラス手抜きはしておれぬ

そのうちに春 地下鉄に吹く風も

種風船の季節がやってきましたよ

もぐら叩き鈍な生まれの女だな

流れながら桃も満干を繰り返す

大きな桃が横を流れてくれている

触れられたことではじまる桃の傷

桃の咲く丘は線路のずっと向こう

ひそやかにさけを放つ月の弦

蝶のようなものを枕に泊めている

遠くから鐘が鳴るので樹をゆする

満ち潮の時刻に手紙書いている

ずっとやりとりしている何でもないはがき

話し相手の眉を曇らせまいと思う

書きすぎぬように大事なひとに書く

書き終えた手紙と二枚貝の殻

みやこわすれ増やしてみやこ忘れられぬ

花房がここに落ちてくる雨だ

雨だれの寂しさ順に死ぬつもり

雪の野にかえるはやすし雪おんな

椿つないであなたに冠をあげる

かくれんぼ男に消えぬ遊び癖

許すまえに少うし腹を立てておく

花いちもんめ明日も太郎と決めている

背の高い人のうしろでお辞儀する

どちらもう少し進んでなんとなく笑う

マツチ箱 眠ったふりも上手でしよ

打てば響く誠実な鐘吊つてある

みんな誠実でまわりを疲れさす

あたたかい嘘にとろとろ寝てしまう

眠り人形をゆすり続けている少女

黙って眠ってそのうち糸を吐くつもり

桃の木の向うのひと世ふた世かな

鳥になる筈の卵を抱いている

抱きすぎて卵を潰さないように

きさらぎの海のやさしさ不安なり

旅の雨　大きな傘を奪われし

訃の受話器置くひと呼吸ふた呼吸

水鶏院　釈真諦と日に三度

切り取った絵に宇治寺の鐘の音

有縁の真ん中に椿が咲いてくれる

花の散る音を金魚も聞いている

鐘鳴らすいつも一つの願いごと

面影をたどると弥陀の眉あたり

前とおぼしきほうに人形足をだす

人形に裱りおしえている少女

桜通りも椿通りも行きどまり

立場こそ違え咲き切る梅さくら

椿くわえて春を銜えて歩きたし

非日常の暦に誘うさくらさくら

桜に凭れて寒さを振り払っている

サイタサイタ咲いてさくらも地に伏した

梅の木の瘤にいつかは身を隠す

わたしの植えた桜に凜と討たれよう

花あまた殊に烈しく白が咲く

白く咲いてくれるだろうか白い蕾

古木ながら蕾に乳を飲ませたや

仏壇の中からひらく杜若

咲けば散ることをひたすら書いている

II

まだ
言えないが
蛍の宿は
つきとめた

潮騒を連れてこの世の月が出る

今はたましいの時間で月の下

月は遙か海は死ぬまで満たされぬ

憎からず思し召されて月光や

月の子を産むかもしれぬ水たまり

織女星逢うてわかれて織るばかり

二番星ぐらいで輝いていたい

最終便に合わす切符は持っている

寝たきりの姉に一つの隠しごと

かばいだてする妹の分際で

指相撲のころから姉を越えたくて

打ち明けてくれた十字架ともに負い

いまひとつ捨身にならぬうちの猫

溺れやすい女が壇の中にいる

新しい潮が玄関から入る

海からの愛を銜えている鴟

一行にしても私の書き下ろし

うす闇のほとけを仰ぐほどの恋

罪の絵もうすい墨なら画けそうな

他人行儀な他人の手紙読んでいる

影しばらく重ねて電車すれ違ふ

如何ほどでしょうか私の身代金

わたくしの齡をかぞえている男

上げるならよほど高めに昼花火

祭続いて道化の鼻もぐしよぐしよに

円い蚊帳　貴妃のポーズで眠りましょ

ふるこーす子産みしころの顎ほしや

なんて優しいのです 現し世の旅は

椿機上 もしやの事もインプット

でもねでもゲートを出れば鳥だもん

しめし合わせて良い旅にいい旅に

枕少しずれて傾く夢になる

やがては闇に沈むにしても月の屋根

菜を洗う旅の火照りはまだ指に

指人形いつかじぶんの指も焼く

日没がこわくてうたうカラスの子

カラスなぜ泣いたもうもう子は産めぬ

節つけて囃す日暮れのカラスたち

死ぬほどのことでないので花を買う

裂けるまで熟れて石榴はしあわせな

この次に逢うのはきつと日溜まりで

花の季は移りそうめん茹でている

弁当の中身大事にされている

弁当が済んだら夏と歩いてみる

夏百日その一日の絵に溺れ

ゆるゆると私を縛る水の絵や

声立てて笑うむかしの川太郎

あわあわと合歓は激しく咲くのなり

合歓の実は合歓のまわりで森をなす

小暗闇あじさいの白しろきまま

紫陽花の赤は遺伝子で死んだ

火消し壺の火種　殺されてはいない

湖が溢れノートになぐりがき

虹を映している雨垂れのひと雫

不意打ちの癖も暦は持っている

サーカスの絵がはなやかなまま滅ぶ

摺り鉢の底でまんがを描いている

うかうかとめくる真昼のプログラム

二枚めもめぐり遅れた紙芝居

栈敷から鬼が総見してくる

ままごととは終わって破る紙の皿

魚の腹から弱い魚が出てきたよ

はらわたに疵がいつぱいある魚

鶴を折る　軽い罪とはいひ切れぬ

かさぶたの下で困っている鱗

空梅雨というのに水浸しの手紙

人を待つすがたに腕を伏せている

皿を洗う　すでに身内に背を向けて

ていねいに洗う落ちたら割れる皿

少し短い箸と慰め合っている

まいにち上がる梯子が今日は恐ろしい

かなり危ない橋が渡してある流れ

水の旅
鱗いちまいずつ流す

同じこと聞かれて同じ嘘をいう

いちにちの時計どうにか掴んでいる

岸
づ
た
い
逃
げ
た
蛭
を
連
れ
戻
す

波
し
ぶ
き
隣
の
塀
を
越
え
て
く
る

大
切
な
人
も
向
こ
う
で
濡
れ
て
い
る

泣き通すのは水守の吹く笛か

若かりし日の母の手の匂いかな

迎え火の三よさで消える逢瀬かや

月の下　　仏千手の盆踊り

河口まで月を送って引き返した

沖からの手紙に波が打っている

家族だからいっしよに転ぶ坂の道

大きな山をじっと見据えている机

今日もいっぽん私の庭に木を植える

どの井戸も底があるので救われる

坂おりるときの景色は見ておこう

そして今 見るべきものは見て歩く

我がマーチ短音階もありぬべし

ハンカチの予備を味方として歩く

壊さない程に陶器も括られる

風呂場の鏡　磨きわすれて寝てしまう

眠りべた　じぶんで子守唄うたう

どうしても眠れぬときは木を植える

夜明けまで山の向こうに行ってくる

水甕があふれて朝を疑わぬ

甕の深いところの水を飲んでいる

雨は晴れてもてのひらにある水たまり

姥捨ての月だよみんな寄つといで

あとさきが抜けても進む踊りの輪

引きながらひきながら潮満たんとす

花びらの重み一枚ずつ違う

夕顔がプラトニックに枯れちやった

体臭になつた傷ぐすりの匂い

嫌われはせぬかこの頃逢いすぎる

サーカスの旗をたたんでいる女

わたくしの枕に三日月の匂い

思い出のありすぎるのも刑のうち

笹に吊すあさきゆめみしゑひもすと

あと何度逢えよう心尽くして逢う

天の川よりゆらゆらともどるなり

沙羅双樹わが結界にひそとあり

III

われは雁

月の真上を渡るなり

標的をしぼるとすれば月の弦

月の弦 鉄の槌よりしたたかに

雁ならばその首 月に翳すべし

死顔を月に預けて翔ぶばかり

兄の闇父の闇へと歩きだす

捜しに出た鬼も行方不明となる

最初から方角違いだったかも

辻々で振り返っては来たけれど

非常口の近くに積んである漫画

夜と朝のはざまの数秒間の湖

今折ったばかりの鶴が翔んでゆく

ロンドンの霧にしばらくかくれんぼ

抱いてやらねば花子が石になりそうで

柔らかく聞けば耳たぶまで仏

焚火囲もうよ傷の掌かざそうよ

どうにか凌ぐ灰のまわりに石積んで

尾が重くなって逆立ちしたくなる

枕にこびりつく昨年の鱗

毬を匿うほど大空は甘くない

どうしても杵を越えなくなるぬりえ

杵組の中で自在の鞠あそび

わたくしを壊す遊びが大好きだ

非日常が漂う午後のティールーム

花火の筒は声を殺して待っている

長袖で隠すさびしい腕だから

錯覚の場所を何度も掃きにゆく

乗りおくれたので
棧橋に木を植える

正確な予報を風は出していた

たまには影に一人歩きをすすめている

一歩手前で危うく神がおととととと

仮の名をもう一世だけ使いたし

朝までを壺の椿はどう過ごす

畳にはぶざまな私を曝す

現実に橋のたもとの一軒屋

焙り絵の顔は観念して焼かれた

誰を信じて点し続ける灯だろうか

その中に一本抜きん出る梢

月光に影ことごとく懺悔せり

男は鬼に女はきつとゆうれいに

息溜めてためて睡蓮咲くのなり

水を欲しがるのは睡蓮もわたくしも

睡蓮の下から話し声がする

わたくしを騙す　いつとき楽になる

楽になるとわたしの影はのたうつよ

妖怪とともだちになる散歩道

罌粟ほどでないが椿に毒すこし

消毒の時間だ月を浴びに出る

毒消し売りが来て毒売りとしれ違ふ

萩すすき忘れぐすりはいらんかね

地底より一樹生いたり曼珠沙華

同じ日に同じ火を吐く曼珠沙華

二十歩を踏めば二十の足のあと

同じ顔している猿と猿回し

双子座も獅子座も天に咲く椿

流星群　天の椿が墜ちてくる

スターダストならわたくしも拾えそう

前世からうけて私の星狂い

太郎を産んだのは夢の中だったのか

太郎いとしや百を数えて生きて欲し

透明になって太郎を横抱きに

起きれば太郎　眠れば太郎抱くばかり

通りゃんせそしてかならず戻りゃんせ

立ち止まると坂はますます坂になる

あたりまえだが一歩踏んでも足のあと

足の裏が痛い　誰かを踏んだらし

見舞われるわたくし大袈裟なわたくし

哀しみを移す寝返り打っている

花束のその後を知っておりますか

ひつじ雲　花子が西に流される

漂うは水の世界と今際にも

白萩が散る　お祭りのあとさきに

はらはらと萩はらはらと旅路かな

おろかにもあとの祭りの酒買いに

祭りのあとの笛をひとりで吹いている

なぐさめてもらうかわりに爪を切る

自らを傷つけて鳴る楽器たち

大根を抜いた穴だけある畑

忌のまえの十日に及ぶ火の指よ

狂いそう
で秋の一
樹に跪く

今は目の
前の老いた
る樹を信ず

星の子は
降りて林檎
の実になつた

ひと盛りになされても匂い立つ林檎

二の矢三の矢まだ正体はわからない

折れた矢を数え残りの矢を数え

いつか壊れる壺をふつうに置いている

風車　　吾が掌にあつて誕生日

その日にもふつうに舟を漕いで出る

僅かながら確かに沖へ漕ぐような

どうにか明けてさて明日の晩 次の晩

いざとなればうしろの藁に火をつける

稲光り天もなにかを産んだのだ

切々と空は手紙を降らすなり

IV

大
屋
根
は
女
主
人
を
信
じ
な
い

境界のところどころに椿の木

稜線で逢うお互いの馬連れて

笛吹いて出れば見知らぬ人ばかり

気がかりな毬を置場にもどしたか

舞台に雪降る　積もらせはしない

十人に椅子が九つある浮き世

二人樹にのぼる一人は降りてくる

一つずつ欠けて最後の菊の鉢

数え唄 椿のばっくみゅうじっく

地に着いてからはへちまも考える

母系かさねて紅の椿の紅の濃さ

風もおとこもとびらを出るとちりぢりに

一 艚が戻らず港乱れてくる

沖に行ってしまったきりの父の枕

夜明けまで首をささえていた枕

攫われた鳥が寝起きをした籠だ

流れるものを見ている拾えないでいる

一齣の喜劇
葬の日らしくなり

葬のあとの両手をこすり合わせている

累代の墓では無頼にもなれぬ

朝ごとの眉をほとけに見つめられ

燐寸売り　　じぶんの火まで売ったのか

抜け殻と間違えないで　　穴の中

枯野にも小さな弓は負うてゆく

忌の日よりつらい仏の誕生日

神もわたしを探し続けていられよう

相談事を提げて海辺に立っている

綱引きの綱におびただしい鱗

麓から唸りつづけているばかり

霧が霽れたら裸木が立っていた

最後に残った勇気で梯子から降りる

結界をくぐり抜けても風の原因

火になれる手前で椿落ちてしまう

覚悟どころか幾度ひきかえしたことか

華は背も華でなくてはならぬなり

手をかけてやらねば雪になる枕

雪を給う山肌の荒れいたわりて

雪ふれば雪ひといろになるわたし

お寺さんの鐘がしよつちゆう鳴る暦

壺をみると水を運んできたくなる

孝行の子も背く子も愛しかり

吉も凶もみんなわたしの冬支度

償いの壺を満たしてから死のう

はみだしたものを納める箱の中

赤を零して拾って生きてゆくばかり

藪椿　最後の旬かとも思う

落ちてから本音吐こうとする椿

椿もし振り袖着れば雪の紋

寒椿　雪と添う日のまなじりよ

寒椿　わがふところに咲かしむる

レパートリーは二つ　咲くこと落ちること

遅かれ早かれ咲いたら落とす椿の木

満潮の音ひびかせて老いるなり

雪の窓この静謐を破るまじ

奥の手は奥にひそめてかくれんぼ

かくれんぼ出てゆく芸が難しい

生きている花を見上げている椿

微笑仏になった椿を知っている

万経にまさる一句を捧げたや

風出　やがて禱りの風ぐるま

説き足りぬことを説こうと仆れた樹

椿無想 落ちて一仏得るのなり

椿守 死なぬかぎりには椿守

今 嘘を書けば昨日も嘘になる

人間の匂いを放つ椿の実

椿 私かも男かも仏かも

椿の忌

いとしい人よ死ぬでない

跋

—

暈す

近くにいる人も、遠くに住んでいる人たちも、どれだけ多くの人がこの句集を待っていたことだろう。この一冊は言葉で言い表わせぬ安らぎを与えてくれる。

出会ってもう二十余年になる。「あじさいの白いときから知っている 藻介」のように彼女の幼少（川柳の）の頃から知っている。風の会では一つの家族にもなつて句を論じ、語り合った。千代の成長過程をじっくり眺めさせて貰った。

八木千代作品の特徴は。

一、女性らしい川柳

例え名が外してあつても、女性らしい言葉が使つて無くても、女を意識し

て書かなくても、作品の中から匂ってくるのは、まぎれもなく「女」である。

一、暈す

短詩型の特技である「暈す」「隠す」が最大限に生かされている。

まだ言えないが蛍の宿はつきとめた

稜線で逢うお互いの馬連れて

これはその代表的なものと言える。また〈蝶のようなものを枕に泊めてい
る〉〈月は遙か海は死ぬまで満たされぬ〉〈気がかりな毯を置場にもどしたか〉
これらもそうだし決して抽象的作品とは思わない。

一、椿

牡丹や芍薬をしのぐとも言われる花の美しさ。厚くて深い緑の光沢のある
葉。どこまでも地を這う強がりな根。女の一生のようなものも隠れている。

わたくしの中を通って咲く椿

境界のところどころに椿の木

この美しい花の艶やかさ、根の張った生命力。自ら求める像の重ね合わせ
かも知れない。

一、家

大屋根は女主人を信じない

母系かさねて紅の椿の紅の濃さ

四人姉妹の末娘だと聞いている。上の三人の姉たちは嫁ぎ、自分が家を継
ぐことになった。千代自身に備わっているものが、家と強く結ばれていたから
であらう。

椿守 死なぬかぎり椿守

句集の題名としたこの句にしても「家」の句だと思う。家が彼女を離さな
い。

一、月

潮騒を連れてこの世の月が出る

わたくしの枕に三日月の匂い

千代の月は祈りであり、同義語である。幼い頃からお月さんに手を合わすことを教えられたのか、父母を真似ていたのか。

句を仕立てるための添えものでない月。月への信仰心のようなものがある。

椿守、八木千代はどんどん根を張り、あちこちで美しい花を咲かせている。多くの人たちとこの一冊に祝盃を挙げたい。

金築 雨学

あとがき

昭和三十九年からずっと川柳さんと歩み続けてきました。長い間を母の介護にそれはごくあたりまえのことと思つて、私なりに尽くしていましたから、不満はなかったのですが、母の枕もとで森田茗人師の新聞柳壇に惹かれて「自分の名の千代を使うなら良い」と、まあ大がかりな許可をもらつての出發でした。

家事にも介抱にも手抜きはしない約束でしたから、句会など当然許される筈もなく、ただ一日に一度だけ眠るとき「お待たせしてごめんなさい」と川柳さ

んに向かい合える日々でした。子育てと台所以外はほとんど無知に近い私がどうやら人らしく暮らせているのは、川柳さんとの出会いからと思っています。

路郎先生のお亡くなりになったその月に川柳塔に入りましたので、直接には、ご指導いただいてはいませんが、清水白柳、西尾葉、橘高薫風の先生方のご恩を受けて川柳さんへの傾倒は一層ふかまりました。

地元にも心を許し合える仲間がおおぜい出来ました。ほんとうに川柳する人はどうしてこんなに優しいのでしょうか。

川柳塔社主幹として、また、ずっと以前から路郎先生を葉先生を、しっかりと塔を支えて来られた橘高薫風先生の身に余る序文を頂きました。そして山陰では風の会以来の畏友、金築雨学さんに跋文をと、このつたない自選句集「椿守」。勿体ないご支援によってありがたく発たせてもらえます。

全然、句集など思いもなかった私のために、散逸していた掲載誌を持ち寄り励ましてくださった友情の作品さがしもあり、未熟ながらも出させて頂きま

した。

長い川柳生活のなかでの多くの恩人の方々、私の川柳を同じような重みで受けとめてくれている大事な家族、待ってくださっていた方たち、ありがたいことばかり。

行く先はいつも未知、今日からは「椿守」を曳きずりながら、見知らぬ物語を歩かねばなりません。この後もどうぞお導きくださいますよう。

ありがとうございました。

平成十一年三月

八木千代

略 歴

八木 千代 (やぎ・ちよ)

本名・信子

大正13年1月29日生まれ

昭和39年 故森田茗人師により川柳
をはじめる

昭和40年 川柳塔の同人になる

昭和42年 女性ばかりのグループ
「きやらぼく川柳会」を創る

昭和56年 山陰の作家による川柳研究会「風の会」会員
川柳塔本社女性コーナー「茴香の花」選者

平成4年 鳥取県川柳作家協会副会長

平成5年 天満屋文化教室講師

平成7年 「オール川柳」読者柳壇選者

平成8年 川柳塔本社近詠欄「渺湖抄」選者
NHK学園川柳講師



川柳句集 椿 守

○

平成11年3月20日 初版第一刷

著 者

八 木 千 代

発行人

齊 藤 俊 輔

発行所

葉文館出版株式会社

本 社 大阪市浪速区恵美須西2-9-15 〒556-0003
TEL 06-6634-5548(代) FAX 06-6643-4431 振替00950-5-95311
東京支社 東京都港区芝大門1-16-9 神明ビル2F 〒105-0012
TEL 03-3578-8608 FAX 03-3578-8607

印刷所

株式会社平河工業社

○

定価(本体2,381円+税)

©Chiyo Yagi Printed in Japan 1999

落丁・乱丁本は本社にてお取り替えいたします。無断転載・複製を禁じます。

ISBN4-89716-092-8